書なり

〔萬の文反古二〕京にも思ふやうなる事なし

朝夕の鍋釜も、それ〳〵に仕入置て、さりとては尻がるに御座候、關東の釣鍋に大束くべて、二時ばかり燒ども、ものゝにえ不申候を、處々とをかしくぞんじ候、

鍋産地

〔庭訓往來〕河内鍋、備後酒、〇略中或異國唐物、高麗珍物、如雲似霞、

〔庭訓往來抄下〕能登釜河内鍋何モ名物ナリ、金氣不出ト云ヘリ、

〔新猿樂記〕四郎君、受領郎等刺史執鞭之圖也、〇略中宅常擔集諸國土産、貯甚豐也、所謂〇略中河内鍋、〇下略

〔毛吹草三〕大和　早鍋（ワサナベ）　播磨　野里鍋（ノザトナベ）

〔國花萬葉記六之二〕大坂名匠諸職商人幷諸問屋

鍋釜吹屋　天滿河内少掾藤原信秀（吹場道頓堀詰、賣所北なべや町、江戸店青物丁、）

〔七十一番歌合上〕六番　左　鍋賣

なにしおへば秋のうちにも播磨鍋ふたゝびにる月をみる哉

うらめしや筑摩のなべの逢ことを我にはなどかかさねざるらん

鍋貢進

〔延喜式二十四主計〕凡左右京五畿内國調、一丁輸錢隨時增減、其畿内輸雜物者、〇略中土師器一丁〇略中平鍋五十口、受二升〇略中

大和國一行程一日　調、〇略中鍋二百二口、〇略中

河内國一行程一日　調、〇略中鍋二百口、

鍋弦

〔今樣職人盡歌合下〕なべのつる賣

かけはづし上手な妹を鍋づるのまがりなりにもこしらへにけり

山梁亭眞慈